

語り継ぎたい風景印

野口 康子 福岡県福岡市 六十四歳

三十七年前の春、道路拡幅工事が行われようとしていた。伐採される予定だった桜の木を憐れんで、近くの市民が短歌を木に吊した。「花あわれ、せめてあと二句、ついの開花を許し給え」と記したら、当時の市長がよほど風流人だったのか、「花桜惜しむ、大和心のうるわしや、とわに匂わん、花の心は」と返歌を吊した。伐採を免れた桜の木、その後、近くの小学生の俳句や短歌が、整備された公園に掛けられるのが春の風物詩だ。

私は三十三年前に今の住居に移ったが、そのエピソードに大変感銘を受け、桜の木を見守っている。徒歩で二十分ほどの、その数本の桜の立つ所は暖かい雰囲気だ。私もこの数年は短歌を記した短冊を吊しに出かけている。

今春、その桜の風景印をエリア内の郵便局で押印してくれると町内報で初めて知った。嘆願の短歌もデザインされた消印は、花守の話を語り継ぐのにピッタリ。私はハガキを入手し、この物語を局内で書き、消印を押してもらった。桜の思い出を大切にし、多くの人に知らせるためにも、風景印を押す手紙を色んな人に出したい。